

---

# ドナテロ

W i z C r a f t

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ドナテロ

### 【Nコード】

N2334D

### 【作者名】

W i z C r a f t

### 【あらすじ】

酒を注ぐ者と注がれる者、ただそれだけの関係のはずだった。黒服の客はいつしか狂気の世界へと引きずり込まれ、そこである選択を迫られる。

薄暗い店内に浮かぶ淡いロウソクの灯り。粗末ながらも手入れの行き届いた木製のカウンターには、酒を飲む黒服の客と酒を注ぐ支配人の二人の姿が照らし出されていた。燭台から放たれるその淡い輝きを受けて、支配人の白い手がそつと伸びる。その手に残されたのは酒の注がれた透き通ったグラス。カウンターに腰掛けていた黒服の男は今ゆっくりとそのグラスを手に取り、一息に飲み干す。

「どうにも物騒な世の中になったもんだな、マスター支配人」

空になったグラスに無言で酒が注がれる。

「この数ヶ月で十人以上も犠牲者が出てる。犠牲者は皆子供。その遺体からは皆首がもぎ取られてるときてる。なあ、狂ってると思わないかあんだ？」

黒服の男は注がれたグラスに手を掛け一気に飲み干した。

「注いでくれ」

黒服の男の言葉に支配人はふとグラスを拭く手を止めた。

「余計なお節介かもしれないが、今日はもう帰った方がいい」

気を配つての事なのか、無愛想にもとれる支配人の言葉に黒服の男は苦笑を漏らした。

「帰った方がいいか。悪いが今夜はここに泊めてもらおう。とこと

ん飲みたい気分なんだな。さあ、注いでくれ」

男の言葉に支配人は諦めたように、酒を注ぐ。

その間、二人の間に言葉は無い。そこに居るのは注ぐ者と注がれる者、ただそれだけだった。

時は刻々と、静かに流れてゆく。

「あんたの眼、深いな」

ふと黒服の男が呟くように言った。

「まるで、幾度も人を殺めてきたような、そういう眼だ」

真顔でそう言い放つ黒服の男に、支配人は何も答えない。

「なんてな、冗談にもならん。十何年もこんな仕事やってると、どうも人を疑ってかかる癖があつてな。まさか、連続殺人鬼がこんなところで酒場の支配人なんてやってるわけないな」

黒服の男はそう言うとグラスを置いた。

「どうも酔い過ぎたみたいだ。あんたの言う通り、今日は帰るとするか」

黒服の男が立ち上がる。

「一つ聞きたいんだが」

支配人はそこで口を開いた。

「仮に自分が殺人鬼だとして、あんたは一体何をやるんだ？」

支配人のその唐突な言葉に、黒服の男から酔いが一瞬醒める。その問い掛けは自身にいつも課していた事だった。この仕事で自らが何をやるのか、それは金か、地位か、名誉か、違う。

「信念だ」

その言葉と共に、黒服の男の身体が揺れる。身体に違和感を覚えた時には既に遅い。

椅子が倒れ、黒服の男はふらふらと身体を大きく揺らしながら、ついにはその場で崩れ伏せる。

「何を……飲ませた？」

視界の先で揺らめく支配人の影。

その言葉を最後に、黒服の男の意識はそこで途切れた。

男が再び眼を覚ますと、そこは窓一つ無い暗い地下室の中だった。酷く寒い。理由は明らかだった。着ていた衣服が身包み剥がされている。身体に不自由を感じ、ふと肢体を見ると、両手両足が鎖で繋がれていた。

どういう事だ、俺は何故ここにいる。思考を巡らせようと闇を見つめていたその時、闇の中から薄っすらと現れたその不気味な影に男は息を呑んだ。

真白な面に十字型の黒い縁取りがされた瞳、ちぐはぐなその面に不自然に浮かび上がる赤い鼻。全身を着余ったぶかぶかの衣装に身

を包んだその道化ヒエロの姿は滑稽というよりか、男にとって底知れぬ恐怖を感じさせた。

「今カラニツ、質問シヨウ」

どこからともなく響いてきた不気味な声。闇から現れたその声の主の姿に男は固まった。道化の片手に握り締められたているのは短剣カ、それが何を意味するのか、男はその答えを知ることを拒絶していた。

「俺をどうする気だ」

そう男が声を上げると同時に、男は悲鳴を上げた。

膝を襲った鋭い痛み、道化が握り締めた短剣は何の容赦もなく男の太腿に突き立てられていた。

「質問以外ノ答エハ認めナイ。嘘偽り無く答エル事ダ」

激しい痛みに襲われながらも、道化の狂気に男は言葉を失っていた。

「質問ソノ巻、ドウシテココヘヤツテキタ」

感情の読み取れない無機質な問い掛け。

その問いに男は、痛みを堪えるように言葉を漏らした。

「……ただ酒が飲みたかった」

男の答えに、握り締められた短剣が再び振り下ろされる。

苦痛の悲鳴が上がる。

「……本当だ、本当なんだ。ただこの付近で殺人事件が多発してるから俺は酒を飲むついでにたまたまここで話を聞いてみようと思っただけなんだ。あんたと話したのも全ては偶然なんだよ」

男は必死に弁明をする。

「もし……あんたを本当に殺人鬼だと思っていたのなら、ここで酒を飲むような真似は絶対にしない」

男の弁明に道化が再び口を開く。

「質問ソノ弐、今日ココへ来ル事ヲ誰カニ話シタカ？」

その質問に男は咄嗟に思考を巡らせる。今日ここへ来た事は誰にも話していなかった。だが、ここで話していないと言えば、間違いなく殺されるだろう。男は生き残るためにただ残された選択肢を言葉にした。

「……話した」

道化の返答は無言だった。

「ここで俺が死ねば、きっとギルドの連中がここを嗅ぎ付けてやってくる。それは確かだ」

流れる静寂。

暫しの間を置いて道化は静かに言った。

「嘘ダナ」

その言葉に男の背筋が固まる。

「今才前八、コウ考エテイル。ココデ話シテイナイ言エバキツト殺サレル、ト。サツキ、才前八言ツタナ。ココへ来タノ八偶然ダト。タマタマ来タ人間ガソノ場所ヲ他人ニ報告スルカ？答エハNO<sup>イ</sup>ダ」

再び、短剣が振り上げられる。

「待て、待て！」

再び悲鳴が木霊する。

「最後ノ質問ダ」

道化は抑揚のない声でそう告げた。

「才前八信念ト言ツタガ、才前二トツテ命ト信念、ドチラガ大切カ、答エヨ」

道化の言葉に押し黙る男。暫しの沈黙が流れる。

男はその静寂を切り裂くように一つの質問をした。

「一つだけ質問させてくれ」

道化は無言で男の質問を促した。

「その選択の一つには生きる道があるのか」

男の言葉に道化は一言答えた。

ドナテロ

「約束シヨウ」

その言葉に男は唾を飲んで頷いた。これで生きる道は示された。あとは突きつけられたこの不条理な選択を残すだけ。

命か、信念か。どちらが正しい答えなのか。不様に命乞いをするべきか、それとも誇り高き信念を貫くか。だが信念のために殺される可能性もある。ならば命乞いをするか？ 神経を集中しろ。今この場で読み取れる全ての情報を読み取るんだ。この道化は俺に何を求める？

「時間だ」

そう言って道化が短剣を振り被った。

「待ってくれ」

もはや考えている暇はなかった。自らの命を守るために、男は一つの答えを出す。

「命だ！頼む、助けてくれ！」

その言葉に道化の腕が止まる。

助かったのか

ドナテロ

ふと男が気がつくところには店の中だった。どうやらカウンターで

いつの間にか眠っていたらしい。ついさっき感じた痛みも傷も何も残っていなかった。全ては夢だったのだ。

「お客さん、もう店じまいだよ」

支配人の声に思わず身を起こす。

「すまない。いつの間にか眠ってしまったんだな。迷惑を掛けた」

悪い夢を見ていたようだ。

黒服の男はよろよろ立ち上がると勘定を払おうと懐に手を伸ばす。

「どうにも、わからないね。そんなにボロボロになってまで、どうしてそんな仕事をするのか。そこに何があるんだい？」

「……信念さ」

黒服の男はそう答えた。だが、それは偽りの答えなのかもしれない。

あの夢の中では自分は命乞いをしてでも、助かりたいとそう願った。自分の命を懸けたあの状況で出したあの答えこそが、自分の本当の姿なのかもしれない。

「いや、訂正しよう。俺の信念なんて所詮は幻想だ、自分の命にかえてまで人を助けたいとは願えない。俺にはこの仕事は向いてないのかもしれない」

黒服の男の言葉に支配人はただ黙って俯いていた。

「また、新しい仕事でも見つけるさ」

黒服の男は勘定を払うと、そうして店から去っていった。

そして店の中に残された支配人は、またいつものように濡れたグラス拭きの仕事へと戻る。

その口元に冷たい微笑みを浮かべながら。

## （後書き）

あとがき

作品を読んで下さってありがとうございます。本作は「セントクリスの悪夢」に続いて読みきり作第二弾になります。

前作は思いきり自己満足の世界でしたが、今回も思いきり片足踏み外してるかもしれません。文章書く事の難しさを改めて痛感しました。

初めは拷問シーンばかりが目に残るただグロイだけの作品になってしまつて描写をかなり削つたのですが、まだ充分えげつないですね。

結局、作品を通して何が言いたかつたのか、そう問われると、立場が無いところ。極限状態に置かれ不自由な選択を迫られた人間が出した一つの答え。そして、最後に、安っぽくなってしまいましたが支配人が漏らした冷たい微笑みの意味を読者の皆さんに色々想像して頂けたら、嬉しい限りです。ちなみに、タイトルのドナテロとはこの物語に出てくる支配人マスターの名です。

こういう事は本来、物語の中で描ききらなければいけないのですが、あとがきに頼る哀れな作者の戯言をお許し下さい。

最後になりますが、本作を読んで下さり本当にありがとうございます。ありがとうございました。

12 / 19 修正

一部の描写を追加・修正しました（内容そのものに変化はありません）

12 / 26 修正

全文を通して、動作主が曖昧になっている箇所を修正しました

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2334d/>

---

ドナテロ

2008年8月29日17時41分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。